日本青年団新聞

Youth Post

2025 vol. 4
110巻第4号　発行2025年11月1日
編集・発行 日本青年団協議会
〒160-0013
東京都新宿区霞ヶ丘町4-1日本青年館5階
TEL 03-6452-9025　FAX 03-6452-9026
MAIL dan_news@dan.or.jp
Web https://www.dan.or.jp/

文武両道

踊りでつなぐ高知と東北の絆
（高知県高知市）

INFORMATION　日本青年団協議会の最新情報はこちらから

「Youth Post・ユースポスト」とは、青年の活動や想いが全国に届くことを願って、Youth・ユース（青年）と Post・ポスト（郵便物）を組み合わせたものです。
本紙は、青年や青年団が全国でいきいきと活躍する姿を伝える日本青年団協議会の機関紙・広報紙です。

雨に唄えば、仲間と踊れば

～雨にも負けない笑顔がここに（高知県高知市）～

8月9日から12日にかけて開催された「第72回よさこい祭り」で、**高知県青年団協議会**（以下、県青年団）を中心に県内の青年団や県内外の学生で構成されるよさこいチーム「にぎわいボニート from3.11」が躍動した。彼らが、雨天のなか乗り越えた4日間の軌跡を辿る。

初日に特別賞を受賞した高知の学生たち

◆全国のよさこい好きが高知に集結

初日の学生大会には、東北各地の学生団体のほか高知大学、北海道大学、徳島大学の学生が出場。高知の男子は赤いふんどし姿で登場した最後の演舞では、会場を大いに盛り上げた。2日目からの本番では、愛媛県のダンスチームや地元の青年団も合流。踊り子、給水係、運転手含めて総勢80名超。みんなでつくり上げる祭りだ。

◆試練が育むリーダーシップ

今年の祭りは雨との闘いだった。天候による演舞日程の度重なる変更や道路混雑による移動の遅れ。祭りでは、出場者自らが日程を組み、移動手段を手配し、来場者への告知まで行う。自主性が求められる仕組みの中で、それぞれの対応力が試された。想定外の試練に負けず、各所の仲間と連絡を取り合い、判断を下す。「よさこいの現場では、リーダーに必要な力が全て試される」と県青年団役員は語る。困難な状況でこそ、次世代のリーダーが育つ。試練が、例年以上に若者たちを大きく成長させた。

◆よさこいがつなぐ多様な活動

県内外の学生、社会人さまざまなメンバーで構成されるにぎわいボニート。数年前から新たなにぎわいが生まれている。県青年団が力を入れて取り組んでいる多文化共生事業に参加するインドネシアの技能実習生や、居場所づくりの取り組みで出会いのあった高校生ボランティアが給水活動で参加したことだ。

異なるルーツ、性別、年齢を越えてともに汗を流す。よさこいが、県青年団の様々な取り組みをつなぐハブとなり、多様な人々が出会い、互いを理解し合う場を生み出している。

鳴子（なるこ）を鳴らして前進すること、「よさこい鳴子踊り」のフレーズを入れること。この2つのルールさえ守れば自由に演舞ができる。土砂降りの中、鳴子を響かせ前進する若者たち。彼らは、仲間とともに困難を乗り越えながら、着実に成長を重ねていく。

お問合せ：Instagramで「高知県青年団協議会」と検索

多文化共生プロジェクトで関わりが生まれたインドネシアの技能実習生も参加。日本語教室の先生もサポートに回った

強い雨に打たれての演舞となったメイン会場「追手筋本部競演場」。雨に光が反射し、いっそう踊り手の笑顔が輝いて見える

▶詳しくは6頁「魅力発掘」へ！

ひと夏の思い出づくり

～久々となる映画上映会の実施～（熊本県球磨郡球磨村）

8月8日、台風の置き土産の雨が降りしきる中、**球磨村青年団**（くまむら）が主催する映画上映会が、球磨清流学園[※1]屋内運動場で開催された。村内の小学生や保育園児をはじめ、約70人の夏休みの思い出の一コマとなった。同青年団の副団長、天野恭平さん（27）は就職を機に同村へ。コロナ禍や令和2年の豪雨災害を経て、子どもが楽しめる企画は何だろうと考えた青年団員ら。天野さんはふと、自身の出身地福岡県柳川市には、子ども向け映画上映会があったことを思い出す。そこで団員に提案したところ好評で、今年の4月頃に企画立ち上げ。上映を委託する映画業者と相談し、相談時点で最も新しいアニメ映画「野生の島のロズ」を上映することになった。しかし心配事は、子どもたちが観に来てくれるのかどうかの一点。そこで主催側は大変だが、夏休みの平日、アフタースクール[※2]期間内にあえて上映することで、多数が観に来られる環境を整えた。さらに蒸し暑い中でも快適に観られるよう、大きな施設かつエアコンがある同会場を、村教育委員会を通じて抑えた。

観終えた子どもの反応は上々で、アンケートには9割以上が「また参加したい」と回答した。天野さんは「子どもと触れ合い元気をもらえた」と、次年度以降の開催も視野に入れている。

子どもの視線をくぎ付けにした

※1 球磨清流学園……球磨村の義務教育学校（小中一貫校）。屋内運動場とはいわゆる体育館のこと
※2 アフタースクール…村教委が子ども向けに、安全な居場所と学びを多様なプログラムを通じ提供する事業

お問合せ：Instagramで「球磨村青年団」と検索

新潟代表の座をかけて

～暑さの中での熱戦～（新潟県新潟市）

8月24日、全国青年大会野球の部の新潟県予選会が、新潟市北区の豊栄南（とよさかみなみ）運動公園野球場で開催された。参加したのは、新潟市消防局と新発田（しばた）自衛隊の2チーム。新潟県内の3チームが協議の結果、大会出場の2枠のうち1枠は前年度優勝のオール三井が出場し、残り1枠の出場枠を争った。

当日は夕方からの試合にもかかわらず、気温も高く、暑さの残る中での一戦だった。序盤は両チームから2本もホームランが飛び出すなど点の取り合いに。中盤以降は投手陣が立ち直り、試合は一転して緊迫の投手戦の様相を呈した。終盤にダメ押しの一打でリードを広げ、消防局が8対4で試合を制し、見事全国青年大会の切符を手にした。勤務の都合で、全員が揃って練習する機会が限られ、チームの連携を深めたり、モチベーションを維持することに苦労したという。全国青年大会という目標があったからこそ、選手同士でお互いに声を掛け合い、チームとして一体感が生まれ、予選会でのパフォーマンスにつながった。

「最後まで全力で戦ってくれた対戦相手には心からの感謝と敬意を伝えたい。ここからが新たな挑戦の始まり。全国の強豪にも、自分たちの野球を信じて全力で挑んでいきたい」と、主将の村川達則さん（35）は語った。

互いに譲らない攻防戦

お問合せ：新潟市消防局チーム　主将　村川　達則さん　Tel：090-4748-4605

地域活動ラボ

地域青年による活動はその多岐にわたる活動を通じて、まちや地域が活気づくだけでなく、人間関係の応答をとおして自分のできることが増えたり、視野が広がるという、いわば地域を担う者を育むという重要な意味を持つ。日本青年団協議会が主催する「全国地域青年『実践大賞』」は、各地の取組を集め、有識者によって評価される貴重な機会である。本企画では、実践大賞に応募された取り組みを審査に携わった審査員自らが分析し、活動の社会的な意義を明らかにしていく。昨年から始まった新連載「地域活動ラボ」。第九回目となる今回は、福井県福井市を拠点に活動する「福井県連合青年団」の取り組みについて紹介する。

2024年度全国地域青年「実践大賞」
審査員　榎木　奨悟　氏
（文部科学省総合教育政策局
地域学習推進課課長補佐）

「取り組み概要」

◆福井県若者交流運動会

福井県連合青年団は、2024年9月1日、コロナ禍で中断していた「若者交流運動会」を4年ぶりに復活させた。かつて若越（じゃくえつ）青年大会の体育部門として定着していた運動会だが、感染症対策で人との接触を避ける登山等に切り替わっていた。第5類移行を機に、青年団員だけでなく市町の教育委員会、福井県モルック協会等も巻き込んだ実行委員会形式で開催。SNSでの発信や各団体への直接的な働きかけにより、県内外から約50名が参加。特筆すべきは、全国青年大会の交流種目「ボッチャ」を競技に取り入れ、優勝チーム「鯖江ガールズ」の全国大会出場へとつなげた点だ。単なるイベントの復活ではなく、新たな仲間づくりと組織拡大の足がかりとなる事業へと発展した。

「解説」

①自発性

コロナ禍を経て生まれた「復活」への思い

2020年を最後に途絶えていた運動会。人との接触を避けざるを得なかった時期を経て、「運動会を復活できないか」という声が役員内で上がったという。注目すべきは、単に「以前のように戻す」のではなく、新しい形での再スタートを模索した点である。

実行委員会形式という選択も、効果的なポイントだった。各地区青年団への呼びかけはもちろん、県内各市町の教育委員会を直接訪問し、実行委員への参加と当日の参加者募集への協力を依頼している。さらに県内で活発に活動する福井県モルック協会にも声をかけ、最終的に9名の実行委員が集まった。この実行委員会は1月から9月まで5回にわたって開催され、要項・日程・会場の確認から始まり、競技決め、参加者集めの検討、ボッチャ体験会の実施など、段階的に準備を進めている。競技決めでは、実行委員一人ひとりに一競技ずつ提案してもらうという手法を採用。スリッパ飛ばし、立ったー（積み上げ競技）、パン食い綱引きなど、ユニークな競技が並んだ。過去の競技を参考にしながらも、新たな要素を積極的に取り入れている。全国青年大会でボッチャが交流種目に決まっていたことを好機と捉え、運動会の種目に組み込み、選手派遣につなげるなど、戦略的な企画も見て取れる。こうした自発的な取り組みは、他の団体にとっても参考になる事例と言える。

②地域との連携

実行委員会が生んだ多様性の輪

本実践の効果的なポイントは、青年団活動の枠を超えた多様な関係者との連携にある。市町の生涯学習課担当者、モルック協会、朝鮮青年同盟北陸支部、鯖江青年会議所、さらには滋賀県の青年団まで、実に幅広い層が参加している。特に県内各市町の教育委員会への直接訪問は、丁寧に相談しながら進めるという点で、非常に効果的な社会教育の実践事例と言える。デジタル時代に、あえて「顔の見える関係」を重視し、一つひとつ足を運んで協力を依頼する。この地道な活動が、単なる参加者募集を超えた信頼関係の構築につながっている。

モルック協会の実行委員参加により、彼らの専門性をいかしてモルックを競技に取り入れることができた。SNSでの発信と合わせて、投稿を見て興味を持った一般参加者も集まっている。地域の様々なステークホルダー（関係者）と相談・連携して取り組んでいる点も、今後の地域づくりにおける重要な示唆を含んでいる。

③波及効果

「続けたい」が生む
持続可能な活動へ

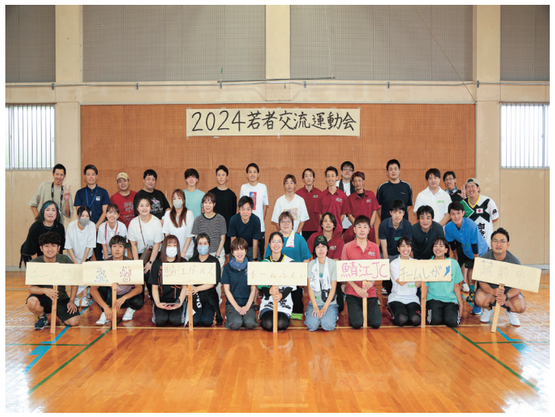
運動会後の展開にこそ、この取り組みの真価が見える。ボッチャ優勝チーム「鯖江ガールズ」のメンバーから「今後もボッチャを続けたい」という声が上がり、全国青年大会への出場が実現。さらに地元スポーツ施設での練習会を数回実施し、その参加者の一部は他の青年団イベントにも参加するようになったという。

これは単なる一過性のイベントで終わらない、持続的な活動への発展を示している。参加者からは「楽しかった」「また来年も参加したい」という声が相次ぎ、すでに次年度の実行委員募集の案内を送るなど、継続・長期的な取り組みにつながることが期待される。興味深いのは、8月31日に前夜祭を開催している点である。単に運動会当日だけでなく、前夜から参加者同士の交流を深める機会を設けることで、より密度の濃い関係性構築を図っている。こうした工夫も、参加者の満足度向上と継続的な参加意欲の醸成に寄与していると考えられる。

最も重要な成果は、この運動会が「福井県内の青年団の組織拡大の足がかり」となった点である。コロナ禍で停滞していた青年団活動に、新たな風を吹き込むことに成功している。多様な団体との連携、SNSを活用した情報発信、そして何より参加者が楽しめる企画により、都市部とは異なる地方における社会教育活動の可能性を示す取り組みとなった。今後、関わる人材の新陳代謝がうまく進み、この運動会が福井県の若者交流の核となることを期待したい。

●お問い合せ
Facebookにて「福井県連合青年団」と検索　QRコードはこちら→

綱引きとパン食い競争を融合させた競技。最後尾の後方に吊るしたパンを最後尾の人が口でとれる所まで引っ張るゲーム



当日の集合写真。青年団だけでなく、SNSで興味をもってくれた方や、過去の事業で関わった方など、さまざまな方の参加があった

8～11月の日青協の動き　10.11核兵器も戦争もない世界を求めて

10月11日（土）、被爆・戦後80年企画「核兵器も戦争もない世界をもとめて～記憶を受け継ぎ未来へ～」を有楽町朝日ホール（東京都千代田区）で開催しました。この事業は日本被団協の呼びかけによる30の団体・個人で主催。日青協も事務局団体の一翼を担いました。

当日は、日青協の杉山会長が開催挨拶を、勝田副会長がリレートークに登壇しました。会場では約300名、オンラインでは約50名が参加し、被爆者の体験や行動に学ぶとともに、核兵器廃絶や平和な社会づくりについて考える機会となりました。

この間の日青協役員の動きを、紙面をお借りして読者の皆様にご報告いたします。よりリアルタイムな情報は、日青協公式インスタグラムにて発信しておりますので、併せてご覧ください。フォローお待ちしております。

毎月17日発売！
月刊 社会教育
創刊1957年。実践家と研究者による市民のための社会教育総合誌。公共施設や教育施設における社会教育はいまどうあるべきか。毎号幅広いテーマで社会教育の在り方を見つめます。
定価：本体741円＋税
旬報社　〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町544 中川ビル4F
TEL03-5579-8973　FAX03-5579-8975　http://www.junposha.com/

日本青年館ホール　検索
「日本青年館ホール」で検索、もしくは右記QRコードよりお読み取りください。
〒160-0013
東京都新宿区霞ヶ丘町4番1号
TEL:03-6447-5660
ACCESS：東京メトロ銀座線
外苑前駅2b出口より徒歩5分
私たちは日本の社会教育と全国の青年団を応援しています。

魅力発掘

もっと知りたい！ 高知県青年団協議会

今号よりスタートする新企画「魅力発掘」。
2ページの Action にて取り上げた実践を行う青年団の活動やその活動地域を深堀り、その魅力を紹介する企画です。
初回となる今回は、高知県青年団協議会の魅力を発掘します！！

◆にぎわいボニート from 3・11

2011年3月の東日本大震災直後、「東北によさこいで元気を届けよう！」という一言から始まり、高知大学の学生と青年団有志40名が宮城県へ向かった。以来13年間、毎年10月に仙台で開催される「みちのくYOSAKOIまつり」を中心に東北との交流を続けている。

チーム名の「ボニート」はスペイン語で「カツオ」の意味。高知の県魚カツオのように元気に泳ぐ（踊る）姿をイメージした。最大の特徴は、曲・振り・衣装を変えないこと。一度覚えれば、就職で高知を離れても、他チームに移っても、いつでも「にぎわいの輪」に戻ることができる。県外参加者の参加費は、宿泊代を含めて一律1万5千円という破格の設定。この価格設定により、インドネシアからの技能実習生や学生など、経済的に余裕のない若者も参加できる。競演場1カ所だけの飛び入り参加も歓迎。「よさこいゲートウェイ」として、誰もが本場高知のよさこいを体験できる扉を開いている。

地方車※のデザインは毎年変わる

※地方車（じかたしゃ）……よさこいのチームごとに1台用意する、装飾されたトラック等の自動車。上に乗って移動しながら踊ったり、音楽を流したりする

◆活動紹介「東北との絆を深める交流」

震災後、宮城県名取市美田園第一仮設住宅（当時）への訪問が恒例行事となった。高知県青年団協議会がスローガンに掲げている「まずは、動く」から始まった訪問が、住民の方々から、元気をもらった、という言葉をかけられたことで、一方的な支援ではなく、互いに元気を与え合う交流へと関係が変わっていく。

現在では東北各地の学生も高知のよさこい祭りに参加。銭形よさこいや四万十市民祭など、本番前の地方祭りでも一緒に踊る。10名集まれば、学生スタッフが全国どこへでも練習指導に出向く体制も整えた。ホームページにアップした動画で演舞の基礎を学び、直前合同練習で仕上げる効率的なシステムも確立されている。震災を機に生まれた絆は、地域や世代を越えたネットワークへと成長した。

復興支援から交流、そして仲間へ。13年の歳月が育んだ関係性は、青年団活動の新たなモデルと呼べるのではないだろうか。

祭り初日の終了後には、大学ごとに取組を紹介して交流した

◆歌詞に込めた想い ～震災復興から、地域再生へ～

楽曲の1番と2番には、異なるテーマが込められている。1番の「切なくて 苦しくて 焦るほど 遠くなる」は震災で失われた日常への想い。「明日じゃなくて今日会いにきたよ／手と手をつなぐ」は、すぐに東北へ駆けつけた当時の青年たちの決意そのものだ。

2番は集落維持へと視点が変わる。「近づき過ぎて気づかないこと／遠く離れても消えぬ想い」。これは高知だけでなく、全国各地で増加する過疎集落に向けた眼差しでもあるのではないか。「君の名を呼ぶから強くなれる」は、青年団や地域の仲間とのつながりを表現している。震災復興から始まった活動は、やがて自分たちの地域を見つめ直すきっかけとなった。東北の復興と地域再生、2つの願いが一つの歌に溶け合い、踊り手たちの心を動かし続けている。

一瞬止んだ雨の中でメンバーの笑顔が光る

←もっと詳しく知りたい方はこちらから！団体の SNS 等につながります！

Youth 掲示板

みなさんの想いや考え方を交換する新企画♪
新聞への感想や事業の告知、報告、日頃考えていることなど
なんでも投稿可能です！！

宮城県青年団合宿！！！

9月13日から9月14日、仙台市の秋保木の家ロッジ村に蔵王町・富谷市・柴田町・角田市・大河原町の青年団が集まり合宿を行いました。合宿ではバーベキューやボードゲームを楽しみました！最後にはみんなで温泉に入り疲れを癒しました。
（宮城県・富谷市青年団・長 煌晟・20代）

北方領土復帰促進婦人・青年交流集会の報告会を開催しました

10月18日、クラウド公民館 seed 主催、北海道青年団体協議会と（一財）北海道青年会館の後援・協力で、7月に開催された第56回北方領土復帰促進婦人・青年交流集会（日青協主催）の報告会を札幌で開催しました。集会報告のほか、北海道からの参加者による感想の共有、会場参加者とオンライン参加者を交えたディスカッションを行いました。元島民の高齢化に伴う次世代への継承の課題や、ロシアとの共存共栄のあり方など、深く学ぶことのできる貴重な場になりました。

領土問題を、国家間の課題としてだけでなく自分事として捉えることの大切さを改めて感じられたと思います。このように地域や立場を越えて語り合える場の大切さを実感しています。
（北海道・北海道青年団体協議会・阪 光平・40代）

Youth 掲示板 お便り募集♪

投稿はどなたでも可能です！下記 URL からぜひお寄せください。皆さんの投稿をお待ちしてます！

能登半島に日青協事務局研修へ

8月20日～21日の2日間、石川県能登半島へ日青協の事務局4人で研修に伺いました。2日間をかけて、珠洲市、輪島市、穴水町をまわりました。

写真は、もともと駐車場だった場所です。地盤の沈下によって、ガードレールが海の中に沈んでしまっていたり、地面はがたがたと波打って、ひび割れたりしていました。大きいところでは地面が4 m も隆起し、海岸線は200 m も遠くなってしまったといいます。珠洲市内の電柱は傾いているものばかりでまっすぐなものを見つけるのが難しいほど。輪島市でも歩道が波打っている場所もあり、穴水町のお寺では灯篭が崩れたまま。多くの神社やお寺が地震の揺れで壊れ、すでに取り壊されて更地になっています。震災から1年が経ち、報道は減ってきているものの、まだまだ被災地は復旧・復興の途中であるという現実を目の当たりにしました。被災地から学び、日ごろからの備えをするとともに、自分のできる支援を続けていきたいです。
（埼玉県・日本青年団協議会・水村仁美・30代）

NISSEIKYO

OPINION　小さくても声を上げよう　～祖父の語った記憶の断片と被爆・戦後 80 年～

今年は被爆・戦後 80 年という節目の年。各地で平和への願いを込めた催しが次々に行われている。平和について考えるとき、どうしても気になるテーマが、筆者にはある。身近な戦争体験をどう受け継ぐか、である。

筆者の祖父も出兵して大陸に渡り、満州戦線を経験した。しかし、祖父は戦争の記憶について「戦争はやっちゃならねぇ」としか語らなかった。唯一、断片的ながら話してくれたのは、ある日突然のこと。満州で銃を撃ち、すねを撃たれて戦線を離脱し帰国した、という話だった。そこで印象的だったのは、「撃たれたからこそ死なずに済んだ」という言葉の裏にあった、日本人が加害者として人を殺していたという事実が、あまり語られないことへの懸念だった。戦争被害者としての側面は強く語られるが、多くの日本人が被害者であり加害者でもあったという事実は、身近な範囲でさえ話しづらい、重いテーマとして今なお横たわる。

今、私たちは何をすべきだろうか。昨年ノーベル平和賞を受賞した日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）の運動がそうであったように、世界を動かすのは、このような身近で小さな「声」から始まるのかもしれない。これにならって、身近な体験者の「声」を聴くことから始められないか。そして、聴いた内容を私たちが自分の言葉で語ることである。筆者の祖父が言葉を詰まらせたように、戦争の記憶に基づく行動は複雑で、被害と加害が混在する、正解のない問いである。どのように、どれだけの人の心を動かしながら行動するか。迷いながらでも良いだろう、私たちが動くのだ。その小さな一歩が、世界を変えると信じて。

IKEDAN イケ団 イケてる青年団員 No.63

青年団活動は充実した趣味

長（ちょう）　煌晟（こうせい）さん（20）（宮城県・富谷市青年団）

元は大変な人見知りで、親の陰に隠れて初対面の人とは全く話せなかった長さん。中学校ではジュニアリーダー（JL）で経験を重ね、話せるように。そしてJLの先輩からの誘いがきっかけで、富谷市青年団に入った。

現在は不登校支援になる事業を企画中。たまたま不登校だった方から体験談を聞いて存在を知り、自分たちにも不登校支援ができる、とボードゲーム企画を発案した。ボドゲに詳しい青年団員のほかJLの協力も得て、実現に向け取り組む。

日頃のつながりから生まれた「自分のやりたいことの実現」、そしてそれが社会のためになる――まさに青年団活動を象徴しているが、これは青年団で身についた考え方だ。子どもが地元でやりたいことに青年団が手伝える土壌や基盤を整えられたら、と語る長さん。そして「青年団活動は充実した趣味」と続けたように気楽に取り組むことが、自分たちの楽しみの先に、次の世代にとっての未来を生み出す秘訣だろう。

難しく考えず気楽にいきましょう

●佐藤　和博（日本青年団協議会常任理事）より投稿

編集後記

今年も全国青年大会の季節になりました。学生時代の文化祭の記憶があるからか、秋は社会人になってもずっと文化祭の準備をしているようなそわそわとした高揚感と忙しなさがある気がします。今年も全国のみなさんとお会いできることを楽しみにしています。

今号から紙面の一部をリニューアルしましたがいかがですか。Youth 掲示板に感想をお寄せいただけたら嬉しいです。（H）

NISSEIKYO

最新の情報はこちら

https://www.facebook.com/nisseikyo01/

Recommend れこめんど

はらぺこ青年団がパワーアップ！
あまり知られていないすてきな場所や食べ物…地元のおすすめを支局員がご紹介。

日光東照宮から日光杉並木街道を南下すると、私たちが活動する大沢地域があります。六尺藤で有名な龍蔵寺では、私たちが企画運営しているランタンナイトを毎年開催しています。180 ㎝に及ぶ藤の花とランタンや子どもたちがデザインしたキャンドルとのコラボレーションはまさに圧巻です。この幻想的な世界観をみなさんにもぜひ感じていただきたい。私たち大沢青年団は結成８周年。15 歳から 43 歳までの合計 40 名で活動しています。イベントで交流を深めたり、子どもたちと一緒に肝試しや自然体験を行ったりと盛りだくさん。現在は地域食堂を立ち上げようと高校生と大学生が張り切っています！

●大沼　絢美（栃木県日光市日光大沢青年団）より投稿